

「どうせ戦争に行かされるのなら、早く行って、同級生よりも先に出世してやろう」と私の父が志願兵として行ったのが昭和十九年の夏、十六歳の時でした。配属先は、鹿児島県国分市にある海軍航空隊です。正に特攻が始まる前夜でした。飛行機乗りになりたい、出世したいというだけで志願したのに、数か月後に特攻の候補生の末席に名を連ねることになってしまったのです。自分の運命なのだろうと半ば諦め、訓練に励みました。

日を追うごとに米軍の攻撃は激しくなり、先輩たちが次々に飛び立っていきました。基地も、飛来する米軍機の爆弾や機銃掃射に曝され、多くの同胞が命を落としました。そして、操縦訓練も進み、飛び立つ日が近づく頃、思いがけない終戦。

死なずに済んだという安堵感と夢が消えてしまった喪失感、逝ってしまった戦友たちへの思いが入り混じる複雑な終戦でした。

終戦後、焼け野原となった故郷に戻り、親族の勧めで、炭鉱に勤めるようになりました。建築部を経て、掘り出した石炭を運び出すベルトコンベアーなどの機械の保守・点検の仕事に携わり、三十五年勤めます。

ある日、部下のミスで、飛んできた金属片で顎を怪我。数針縫った程度の軽傷でしたが、一月以上休みを取っていなかったこともあり、上司の指示で翌日は休むことにしました。

久しぶりの一家団欒。夕方、テレビを見ながら食卓を囲んでいると、  
「三井三池炭鉱炭塵爆発」

この事故で、多くの同僚を失い、父の交代要員として出勤された方が亡くなられました。自分が起こしたことでなくても、結果として身代わりになられたのです。生きて家族と過ごせる幸せと重い罪悪感。亡くなられた方にもご家族があります。

特攻で死なずに済み、炭塵爆発の災禍も逃れた父。しかし、心には大きな悲しみと重荷を背負っています。

運が良いとか悪いとか言いますが、何をもって良しとするのか、悪しとするのか。その人の人生への向かい方によるのではないのでしょうか。